臥しゐても

芹沢茂登子歌集

1996年５月　ホテルインターコンチネンタル東京ベイにて

臥しゐても

目次

I　臥しゐても……1

臥しゐても

入院雑詠(一)／入院雑詠(二)／退院／小学校／早春雑詠／かたくりの花／旅に出て／四万十川／家近くにて／散歩の道すがら／栗駒吟行／鬱蒸動の池にて／一弦の琴を聞きて／冬の池をめぐりて／耳を病む／菜の花への思ひ／女孫重き病に／台風近づく室戸岬／虹に出会ひて／吾子嫁ぎゆく(一)／吾子嫁ぎゆく(二)／高知への空の旅／師走の高知にて／高知得月楼の盆梅／病院点描／竹の香支部歌会にて／自歌自註／クラス会の友／八月十五日／上高地の秋／初めてに見る日本海／加賀友禅工房にて／退作展に思ふ／山を恋ひて／友がんに逝く(一)／友がんに逝く(二)／秋の加賀に友を訪ふ／四万十川を行く／ねぢ花をいとしむ／篠懸の大樹ありて／立葵折れず／烏よ鳥よ／久に訪ふ下野の家／歌人の家／土佐山田のお婉堂に／高知回顧／桜を見むと／古都西安の春／松の大樹よ／ある窓から／垣の朝顔／雲の移ろひ／鳥の声満つ／腰痛き日に／冬の病室／雪降りしきる／花々に寄せて／珍なる蘭／リハビリの日々／「サキクサ」を待つ／臥してゐても／絶詠

解説／濱口喜久子　82

Ⅱ　女性と短歌……85

女性の短歌から見た昭和と戦争……87

プロローグ　87　恐慌で明けた昭和の初期　90
多産多死の時代　92　恐慌の痛手を最も受けた養蚕農家　95
四季を彩る物売りの声や音　97　戦争への幕開けと冬の時代へ　100
離婚できずに堪えしのぶ妻の姿　102　あかぎれの痛さ身にしむ冬　105
改まった気持で迎えていた新年　107　針仕事　110
満州事変・肉弾三勇士　113　農作業の喜び　115
父や兄への思い・結核の猛威（一）　118
女が病む日々・結核の猛威（二）　121
ふるさとを恋う　123　家族団欒と心の充足感　126
働く女性達の日々から　129　馬との別れ　132

解説／坂口　郁　135

大原富枝と「婉」の足跡を訪ねて、そして短歌のことども……138

野中婉との運命的な出会い　140　大原富枝さんの短歌にふれて　143
婉ゆかりの地を訪ねて　147　お婉堂を訪ねる　149

解説／坂口　郁　151

Ⅲ　原宿の職場句会より……153
原宿の職場句会より　155　原宿の職場句会作品集「あとがき」　157
句会／一九八七年七月十二日　158
あとがきに代えて／芹沢寿良　163
芹沢茂登子の経歴と著作について　168

カバー装画　伊藤和子
本文カット　糸内公子

I

臥しゐても

入院雑詠 (一)

清拭のタオルの熱さ心地よく肌を通して身内に沁むる

とめどなく話しかけくる人を避くわれに聞きやる力はなくて

白髪の掃除夫来たり呟きぬ妻リュウマチにて十五年臥すと

もののものしきモニター機器も今はなく隣室の人けさ逝きしとぞ

鳥々の囀りかすかに聞こえきて夜明けのけはひ伝はりてきぬ

入院雑詠 (二)

今日よりは歩行訓練始まりしひと足ひと足踏みしめ歩む

僅かなる距離を歩みしのみなるにわがふくらはぎいたく固まる

エレベーターの僅かの段差に戸惑へるパーキンソン病む人を見守る

リハビリに廊下を歩く人々のもつるる足音朝のまだきに

外泊を許可されし人背広着て今朝管理職の顔となりたる

退　　院

ナースへのお礼のことばしたためぬ明日退院の夜の終はりに

入院は真夏日なりき三月経て退院の今日風の冷たく

寝室にスイトピーの花活けありて退院の夜の心和みぬ

退院の日に娘より贈られし花の模様のふとん華やぐ

病癒えて明るき色を求めをり濃きくれなゐのセーターを選ぶ

小　学　校

休日の小学校の厨房に大鍋鈍く光り並びゐぬ

ぐいぐいと一輪車をこぐ子らありてみな頬赤し午後の校庭

野球帽のつばを後ろに一輪車こぐ子はなべて女の子なり

幼らに家路促す放送の声のやさしく街暮れゆきぬ

通夜客に賜はりしバラの一輪の白さ見つむる夜更けの部屋に

早春雑詠

スカーフの色に合はせて雨の日を濃緑の傘さして出で来ぬ

梅咲くを探し求めて今日もまた散歩の足を少し延ばしぬ

白梅に添ふがごとくに紅梅のありて対なす農家の広庭

見上げたる高圧線の空高く数多架かりて図形のごとく

裸木の姿それぞれ異なりて楓の梢は細くかぼそし

軽やかにバイクの音の聞こえきて郵便屋らしまた走りゆく

かたくりの花

かたくりの花を求めて練馬路をあちらこちらと迷ひつつ行く

かたくりの花と初めて今日知りぬ薄紫の姫百合に似る花

木洩れ日にかたくりの花浮き立ちて花の紫やや濃く見ゆる

丈低く小さき花なりかたくりは跪きつつ顔寄せて見る

かたくりの花弁は薄く反りかへり冷たき風に小刻みに揺る

旅に出て

寄する波引きゆく波のおだやけしその単調なる音快き

玻璃戸越し展望台より見る海は波音もなくきらめきわたる

霧雨の降りつづきゐて三国路の赤谷の湖は深き鈍色

久々に訪ひ来し女孫幼沙蘭はにかみにつつ手をさしのぶる

山宿のゆかたを着ればかしこまり正座をなせる幼な女孫は

波の音あくこともなく聞きをりぬ病も癒えて春の浜辺に

四万十川

山の端に日は沈めども四万十の川のさざ波あかねに揺るる

暮れなづむ山々の間四万十の川面は鈍き銀の色せる

四万十の中州におりてひぐらしの声を聞きつつ佇みゐたり

川下りの旅は終はりに近づきて日暮れし川面の黒ぐろとせり

とつぷりと日暮れて暗き川下に灯の一つ見ゆ舟つき場らし

家近くにて

人ゆかぬ昼下がりの道わが行けば猫ゆつたりとよぎりてゆきぬ

サーカスの綱渡りの如手を広げ電線の影を踏みゆく子のあり

忽ちにわれを追ひ抜く自転車の少女ら明るき声を残せり

図書館の閲覧室の昼下がり静けきなかを寝息聞こゆる

たちまちに丈高き草に埋まりぬ立退き跡の広き空地は

散歩の道すがら

鰐出づと騒がしかりし池の辺の日暮れていまは静まりてあり

木下かげ将棋打つ人囲む人日暮れてなほも動かずにあり

建てこみし住宅地の中の道の辺に一列に咲く彼岸花あり

散歩道逆にいゆけば常の街異なりて見え戸惑ひ覚ゆ

またしてもかすかに蚊の声迫り来て暗闇のなか耳澄ましゐる

栗駒吟行

鳥追ひを舞ふ子どもらのきびきびと一陣の風吹きわたるごと

鼻筋に白粉刷きて鳥追ひを舞ふ子らの顔凛々しかりけり

鳥追ひを舞ひ終へし子ら装束を脱げば素顔のあどけなくして

金色堂守れる古き覆堂は杉の木陰にひそと建ちをり

中尊寺訪ひての後は「炎立つ」ドラマを見るも身を乗り出して

友に借りし中尊寺の書に数多なる傍線ありて心打たるる

鰐騒動の池にて

鰐捕ると池に浮かぶる筏には鴨の二羽ゐてのどかなること

鰐出づると噂のあれば池の辺の茶店は今日も賑はひてをり

鰐見張り池めぐりゐる警備員に今日もひと声かけて通りぬ

鰐見張る警備の人は所在なく散歩の犬と戯れゐたり

この池にゐるとふ鰐の現はれず年明け訪ひ来る人の減りゆく

この池に茂れる葦の素枯れゆき鰐の話題も下火となりぬ

一弦の琴を聞きて

秋の夜に聞きし一弦の琴の音の夜更けを時に耳に聞こゆる

宴にて言(こと)交はすなく別れにし琴弾く人の歌集ひもとく

一弦の琴の音色の悲しみを歌集を読みて初めて知りぬ

外つ国の空にて散りしお子思ひ一弦の琴奏づる君は

雛の日の命日となりて子を思ふ人あることに胸を衝かるる

断ちがたき子への思ひか一弦の琴の音色に深くこもるは

冬の池をめぐりて

池の面に薄ら氷のはりつめてサランラップに覆ひたるごと

まひる間の冬の池の辺静けくて車椅子の人ひとりめぐれる

池の辺をゆるりこぎゆく車椅子の影鮮やかに水面に映る

杖つける髪白き人歩をとめてわが追ひ抜くをしばし見つむる

対岸のなだれに雪の積もりゐて池に映れる白まさやけく

春までは休みとありてボート池のあたまの舟は雪かぶりゐる

池の面に鴨のつくりしひと筋の波は刃(やいば)のごとく光りぬ

耳を病む

水中に身を沈めたるごとくにも物音遠のく朝突然に

耳栓をつめたるごとく人声の急に聞こえず耳に手をやる

砂利道を踏みしだく如き音のして夜半の耳鳴りさらに高まる

病める耳を下にし寝ぬればコツコツと今日の耳鳴り常と変れり

聞こえにくきわが左耳案じつつ会議の席の位置を定めぬ

二度三度問ひなほすことを憚りて耳病むわれの口重くなる

「春の丘」と名づけし葉書売られゐてやさしき色に心ひかるる

菜の花への思ひ

幼き日父と歩みし大和路の菜の花の色あたたかかりき

彼方まで菜の花見ゆる丘の上に昼餉の席をつくりて休む

幼き日訪ひし大和は菜の花とれんげ畑のはるかに続きゐき

小さき足れんげ畑に投げ出して母と憩ひし大和路の旅

いちめんの菜の花畑に身を埋め子らと遊びしはふた昔前

家内に赤子の泣き声響きゐてわれの内にも力みなぎる

女孫重き病に

髄膜炎とふ女孫を冒しし病の名ただ呟きをり受話器を置きて

生れてまだ三月と経たぬ女孫なるに点滴の針の腕に刺されて

わが命に替へても女孫守らせとただ祈るのみ暗き社殿に

ベル鳴れば悪しき知らせかとをののきぬ女孫は重き病なりせば

告げられし女孫の検査値悪しければ心に暗き雲のひろがる

雑踏の人の流れに身をゆだね泣きゐるわれやだれも気づかず

台風近づく室戸岬

荒れすさぶ海を見たしと台風の予報聞きつつ室戸へ向かふ

やみくもに荒れたる海を思へるは胸に淀める澱のある故

畳なはる山脈のごと幾重にも高波寄する室戸の海は

まなかひの屏風の如き高波は打ち寄せきたるわれに向かひて

渾身の力をこめて打つごとく岩にあたりし波砕け散る

岩の間に揺れに揺れゐる波の花時にふはりと舞ひ上がりゆく

虹に出会ひて

何かよきことのあるやも西空に大きくかかる虹を見にけり

ゆくりなく虹に出会ひて消えぬ間に女孫の病の癒ゆるを祈る

虹を背に写真とりたしとわれに請ふ若き二人は新婚らしき

半円の弧を描きたる夕虹の頂のあたり雲の覆へる

たまたまに出会ひし虹の消えぬこと願ひつつ暫し佇み見つむ

虹の色の薄くなりても去り難く尚しばらくを佇みゐたり

吾子嫁ぎゆく(一)

嫁ぐ日の間近となれば子の好むひじきなど煮て夕餉待ちゐる

嫁ぐまであと七日なり出勤の吾子の姿を門に見送る

肩寄せて式次第のこと語るらし若き二人に茶菓を持ちゆく

いそいそと彼を送ると出でゆきし吾子の帰りをいらだちて待つ

婚礼の明日こそ晴れよと祈りつつ寝ねし夜半に雨音聞こゆ

式終へて新郎と歩む吾子の背を遠きを見ゆる思ひに見たり

今日よりは帰らぬものと思ひつつ嫁ぎし吾子の帰り待ちゐる

吾子嫁ぎゆく(二)

嫁ぎゆき二日たたぬをあしたより吾子の電話を心待ちゐる

嫁ぎたる子の声聞きたく瑣末なる用を探してダイヤル回しぬ

子の嫁ぎうら寂しくてこの夜も赴任地の夫に電話かけをり

新しき苗字名乗れる子の声に戸惑ひ覚え受話器持ちをり

吾子を待つ張り失ひて黙々と夕餉食むなり嫁ぎゆければ

華やげる蘭を選びて新婚の吾子ら帰りくる部屋に活けゐる

新婚の吾子ら二人の訪ひ来るを時計を見つつ落ち着かずをり

高知への空の旅

機上より真下を見れば厚雲の小さき隙間に光る川見ゆ

海原のごとく果てなき雲海をつき破り見ゆ富士の嶺はも

空ゆ見る渚の波は動きなく白きレースの縁どりに似る

高度九千米の空より見れば紀伊半島山川渚の地図を見る如

晴れわたる日の海空より見下ろせば船は白魚の様にも見えて

空ゆ見る海に白きもの散らばりて船かと問へば波頭といふ

群青の土佐湾真下にひろがりて着陸の予告告げられてをり

幾年も通ひ慣れたる空港に高知訛りをなつかしみ聞く

師走の高知にて

暖冬のゆゑか師走の土佐の野に未だ色濃きコスモス咲けり

正月も間近といふにくれなゐの楓は未だ燃え立つごとく

料亭の門に門松飾られて師走も半ばと思ひいたりぬ

しめりたる銀杏の落葉の敷き詰むる黄なる坂道滑りつつ登る

古びたる鳥居に刻む施主の名は土佐鰹商何某なりと

黒ずめる石の鳥居に奉納の年を刻むも定かに読めず

金五圓と刻む奉納の石ありていつの代なるやと思ひめぐらす

狛犬の左右の面差し異なりて右は口開け玉を噛みゐる

いつしらに高知訛りを覚えゐてひとりごとにもふと使ひゐる

高知得月楼の盆梅

老舗なる料亭にして三百の盆梅育つる百年余りを

常の日は上るも難き得月楼の梅見の月は誰しも招かる

得月楼の梅守り継ぐ主ありて四代目とぞ古稀を越えます

盆梅と聞きて来りし得月楼のその梅の丈見上ぐるごとし

咲き終へし梅花一つ一つ丹念に摘みをり庭師細き箸もて

天女とふ名札かかりし枝垂れ梅の枝伸びやかに天舞ふごとく

百まりの梅の風情は異なりて名札を見つつ諾ひてをり

大広間に数多置かるる盆梅に見入りてあれば足元の冷ゆ

病院点描

スペインの人らし隣りの病室に外つ国の言葉飛び交ひてをり

スペインの人の病室賑はひて退院の日の間近なるかも

たどたどしき日本語使ひ繰り返し医師に問ひゐる中国の人

見上ぐればかつて過ごしし病室の窓に白衣の人影のあり

長病みの人か足もと頼りなくレントゲン室へよろと入りゆく

車椅子の人輪になりて語りゐる桜散りゆく病院の庭に

ゆくりなく出会ひし友はたつた今再入院の手続きせしと

園児らの散歩コースか窓下を喋りゆく声今日も聞こゆる

竹の香支部歌会にて

「口紅」と席題決まればそこここに戸惑ひ洩らす溜息聞ゆ

即詠の題決まれるやいちはやく隣りの人の書き初むる見ゆ

鉛筆を叩くがごとくコツコツと書く音聞こゆ即詠の席

「口紅」と呟きみるもわが思ひ歌にはならず時の過ぎゆく

「口紅」の思ひそれぞれ異なりて七人なりの歌生まれたり

退院も間近となればその在り所忘れてをりし口紅探す

病癒え初めて街に求めたる口紅の色は赤きバラ色

友なべて六十路となれどある時は笑ひとまらず少女子のごと

自　歌　自　註

点滴の次の雫の落つるまで動くものなき夜の病室

見舞客が帰った後の夜の病室はまことに静かである。そして、病人が最も孤独感を感じる時でもある。私はベッドに仰向けに寝て、固定された左腕に針を刺され、点滴を受けている。点滴液が一定の間隔をあけてポトッポトッと落ちてくる。次の雫の落ちるまでの僅かな間がなんと長く感じられたことか。病室のすべての動きが、いや時間すら凍結されてしまったようなこの瞬間、私は息をつめて次の雫の落ちるのを待っている。

クラス会の友

短歌こそ生きる証と熱をこめ語れる友の頬上気して

ひたむきなる短歌への思ひ語りゐる友の真直な心響ける

杖つける同窓の友の面差しに愁ひのありて気にかかりゐる

おだやけき微笑み浮かべ夫の亡き日々にも慣れぬと友の語れる

三年まり会はざるうちに友の髪白さを増して何か悩める

心なし丸くなりたる友の背に六十路のわれを重ねて見つむ

野の花を愛づる友らし友禅の着物の裾に秋草描かる

還暦を過ぎし友どちそれぞれに残る生き方定めてゐたり

八月十五日

終戦の日を忘れじと続けきつわれら老いしがデモに今日行く

蟬の声俄に高まり鳴きしきる戦没者への祈りの時に

戦ひに逝きにし人ら悼みつつ祈るうなじに汗流れゆく

八十路なる友の姿の見えざるをデモの中にて気にかかりゐる

八十路なる女も混じる不戦へのデモ真夏日を黙して歩む

「反核」とふ文字貼りつくるパラソルをさして歩みつ八月十五日

四十路過ぎ召集されし父なればレイテの暑さいかにこたへし

いつしらに父の姿を重ねつつ「レイテ戦記」の映像見つむ

上高地の秋

登りゆく長きトンネル越ゆるたび山の紅葉さらに色濃く

山宿の四角き窓に紅葉の山は絵のごと納まりゐたり

ことのほか暑き夏にて梓川の涸れたる瀬音かすかに聞こゆ

暑き夏なれば名残りの雪もなく岩肌凝しき穂高の山は

眼交に穂高はありて頂きのひときは赤し日の落つるまで

晴れゆけば明神前穂奥穂高山々すべて現れ出づる

山宿の窓開けたればぬばたまの闇の彼方に瀬音聞こゆる

初めてに見る日本海

日本海見ゆると聞きてわれもまた車窓に寄りて見入りたりけり

空と海大きく分けて日本海その藍の色濃く深くして

ひと筋の線引くごとく水平線の海の色濃く空とを分かつ

初秋の穏しく光る日本海常には荒るるも波もあらなく

黄金なす稲田の果てに海ありて光まぶしみ目を細め見つ

やみくもに海を見むとて訪ね来つ暮れ方の浜にわれ一人立つ

暮れ方の海果てしなく広がりて鈍色の波われに寄せ来る

鈍色の海ゆ寄せ来る波頭暮れゆくままに白さ消えゆく

加賀友禅工房にて

人気なき友禅工房おとなへば白檀の香のほのかにかをる

少女子の面影残す若き人友禅の技いちづに語る

友禅のこまかき技の難きこと説きゐる人の頬上気して

一心に萩の花びら描きゐる友禅職人面を上げず

職人の友禅模様描きゐる筆の運びを息つめて見る

花嫁に贈る慣ひの花のれん飾りてあれば部屋華やぎぬ

友禅の花嫁のれん四季の花咲き競ふごと染め上げられし

友禅の小袋財布風呂敷とみやげ選びにひとり迷ひぬ

棕櫚竹の鉢しまはずに出かけしを雪空見つつ悔やみてをりぬ

遺作展に思ふ

子の生ると飛ぶが如くに走り来し父となる友汗を拭きつつ

死産せし次に生れたる子にあれば友の喜びいかばかりなる

まづはまづサンダルばきに出産の見舞ひに近き病院を訪ふ

とりあへず見舞ひの品にわが選ぶ台湾バナナの房の重きを

息ひそめ病室のドア押しみれば産婦も赤子も眠りゐるらし

遺作展の友の絵に見る若き日の色何ゆゑになべて暗きか

若き日に友の描きし自画像の眼鋭くわれを見つむる

病みて後友の描ける野や森に菜の花色の光あふるる

山を恋ひて

山靴も雨具の在り処もわかぬままいつしら過ぎし四十年の日々

槍穂高間近に見つつ歌ひつつ尾根歩きしは若き日の夏

雪渓の白きに立ちて微笑めるわが写し絵の若さまぶしき

岩山を這ひて登れる写し絵のわが眼差しよ一点見つむ

箱根なる金時山とふ名も楽し久しぶりなるわれが山行き

金時もまさかり担ぎて登りしかこれの小暗き険しき道を

木々の根をしかと摑みて這ひ登る金時山といへど険しき

喘ぎつつ登りいゆけば突として富士現れぬ視界開けて

友がんに逝く(一)

あまりにも激しく生きてあまりにも早く逝きたり友五十九歳

愛するも憎しむことも強ければ時に悔いゐる友にてありき

夫や子と花に囲まれホスピスに過ごせる日々の友安らけし

ホスピスの窓ゆ広がる枯芝のぬくとき色を友は好みき

今頃は出棺の時かフィレンツェのホテルの窓ゆ空を見てゐき

ヴェネツィアへゆくバスの席に身を埋め独り黙して友の死を思ふ

果てしなくロンバルジァ平野続きをり亡き友思ひつつ虚ろに眺む

友がんに逝く㈡

入院の友の窓辺に雛ありて早や三月まり過ぎたるを知る

がんを病む友を乗せゆく車椅子押せど思ひの向きには動かず

見舞ひしは一昨日なるもがんの友今日の眠りのさらに深まる

幽かなる声にてわが名呼びくるる友の手取ればまた眠り入る

病む友は何言ひたきや唇をかすか震はせ吾れを見つむる

西行の詠みしごとくに死にたしと桜の咲くを待ちてゐし友

南より桜の花の咲き初めて弥生半ばを友は逝きける

さくら花春の花々飾られて友を偲びぬ「お別れの会」

夜半覚めて闇の部屋内眺めゐれば仏壇などのおぼろ見えくる

秋の加賀に友を訪ふ

髪白き友と初めて出会ひしは湖も凍れる北欧の旅

友禅のドレスの色の藤色は白髪美しき友にふさふも

加賀に住み源氏物語講義せる友はも常に背すぢ伸ばして

古への花を好める友なれば秋の七草持ちて訪はむか

秋の花選べるわれに藤袴教へてくれし店のあるじは

友訪ひて案内されたる文学館に犀星の部屋ありし日のまま

旧制の四高の校舎そのままに木の床きしむ文学館なり

八十路なる友より賜びし夫婦箸うるしの香り箱にこもれる

準サキクサ賞　四万十川を行く

今朝捕れし蟹動きゐる魚籠を見せ漁夫は語れり四万十の漁

手すりなく一本道の沈下橋(ちんかばし)初めてに見つ四万十川に

川荒るる時し流れに逆らはず沈みしままの沈下橋とや

沈下橋渡りいゆけば川の面の流れは速く目まひ覚ゆる

四万十の四季の話を聞きてをり川風わたる舟主の家に

杉皮に屋根を葺きたる屋形船白き障子の川面に映ゆる

小さき魚ときに光りて川底に身をひるがへす四万十の川

夫は漕ぎ妻は艫にて鮎焼きて舟はゆるりと四万十を行く

川のりもえび蟹うなぎ鮎なべて四万十の幸舟の昼餉に

四万十の中州に立てば対岸の高き木末にうぐひすの鳴く

ねぢ花をいとしむ

『花綵』に友の詠みけるねぢ花を初めて見たり病院の庭に

薄紅の粒ほどの花一つ一つ下より咲かせ伸びゆくねぢ花

吾が摘みしねぢ花われが枕べに置きて見入りぬ咲きゆく様を

枕辺に小さきねぢ花挿し置けば野にあるごとく心なごむも

ねぢ花の花は粒ほどに小さけれど花びら三枚しかとつけゐる

枕辺のねぢ花の色の紅の薄れいゆくもまだ捨てかねつ

花綵とふ美しき言葉の深き意味思ひつつ今日もねぢ花を見つ

篠懸（すずかけ）の大樹ありて

病院の庭の篠懸はるかなるギリシャの木より分け植ゑしものと

篠懸の木蔭に坐してヒポクラテスの医を説きたりしは二千年前

親木なるすずかけは樹齢三千年太きその幹洞となれりと

分け木して二十年を過ぎし篠懸の幹太くしてゆるぎなく立つ

篠懸の大樹の下にわが立てばあまたの鳥の声の降りくる

篠懸の大き葉一つかすか揺れ小さき鳥のつと飛び立ちぬ

やはやはと大き葉垂れて朝風に揺れそよぎゐる篠懸の木は

篠懸の木を見上ぐれば鈴ほどの小さき実あまた葉蔭に揺るる

今日よりは強き薬の減ることを告げし主治医の声あたたかく

立葵折れず

六階の病室に見下ろす木群ごし揺れゐる花は立葵らし

夜半強き風の吹ければ立葵折るるを案じ寝ね難くをり

強き風に打ち伏しにつつ揺れゆれて尚折れずあり立葵はも

嵐去る真夏日の今日立葵しかと立ちゐて咲き上りゐる

真夏日の強き日受けて立葵朱の色しるき花あまた咲く

ひと群の立葵の花みな白く夕暮れてなほほのかに見ゆる

すくと立つ立葵見れば再びを事をなさむと気の満ち来る

鳥よ　鳥よ

再びの入院なれば荷作りを手早くすませ車待ちゐる

庭の草引かずて家を出で来しが気にかかりをり病室にゐて

病室の窓に常見ゆるアンテナに常ゐる烏塑像のごとく

アンテナに止れる烏飛び立つはいつやと見をりなす事なければ

彼方なる森のあたりか夜の明けに烏らの声まづ聞こえくる

高き声低き声あり烏らの鳴き交はしつつねぐらに帰る

ひとしきり騒がしかりし烏らの声止みぬれば雨降りてをり

つややかに長く尾を引く鳥の声空いつぱいに響きわたるも

夢に会ふ母の姿は野に立ちて近づきゆけばつと遠のきぬ

久に訪ふ下野の家

古きえにし頼りて訪ひし下野（しもつけ）の米所なる萱葺きの家

訪ね行く家を囲ひし屋敷森はるかに見ゆる稲田の果てに

収穫の間近き稲田の黄なる穂のなべて水漬けり嵐の後を

枝垂れ咲く萩ある家とふかすかなる記憶辿りて訪ねゆきたり

蔵内に冷ゆるも忘れ『初恋』を読みふけりゐし十五のわれは

今年こそ訪ねゆかむと思ひゐて果せぬままに叔父身罷りぬ

夫のこと語りつつ涙ほろほろとこぼしゐるなり残されし叔母は

つややかに光る白米粒立つを口にふふみて旨み嚙みしむ

庭に咲く秋の花々手折りしを土産に賜ひぬひとり居の叔母

歌人の家

本二冊小脇に抱へ歩みゐる髪白き人と今日も出会へり

髪白く物思ふがに歩む人のなにか風雅の趣ありぬ

宮中の歌会のテレビに映りたる選者は吾れの知れるその人

道すがらざくろのなるを楽しみに見てゐし家よ歌人の家は

六十年の歌歴積みたるうた人の住まひを知りて敬ひて見つ

玻璃戸越しに見ゆる書斎に書のあふれ傾きゐたる歌人の家は

書きものをするらし今日もうつむける歌人の姿塀越しに見ゆ

ゆくりなく門より出で来しうた人に出会ひてなぜかうろたへてをり

土佐山田のお婉堂に

土佐の地の治山治水に尽しにし野中兼山(けんざん)名奉行なる

謀叛との汚名着せられ兼山の家族はなべて幽閉の身に

はるばると辺境の牢に送られし婉女は未だ四歳なりき

婉の住む幽居を囲む竹矢来切先鋭く光りたりしや

兼山の血を引くゆゑに四十年を幽居にありて生きし婉女は

先逝きし姉兄弟五人(いったり)の死を見つめつつ婉は生きたる

家族(うから)らの死を弔ひて小さき堂建てしお婉の思ひを思ふ

お婉堂いづこと問へば畦道に上りて森を指差しくれぬ

古びたる御堂囲みて小さき森三百年の日々守り来し

高知回顧

夜明けまで語り明かして夫ひとり赴任すること二人し決めぬ

プロペラの小さき機体に身を託し高知に来しは十八年前

飛行機の揺れ激しくてひたすらに高知に着くをわれは祈りき

土佐の地に降りて見やれば丸やかな山続きゐてのどかなること

飯(いひ)を炊く水の量など教へつつ夫の独り居に心痛みぬ

家族らと離れはるけき土佐の地に一人住む夫を残し帰り来

夫のなす最終講義の教室にわれも坐りぬ面を伏せつつ

酌み交はす盃の数増えゆけば笑ひどよもす別れの宴

四万十をまた見に来よと土佐人のわが手離さず幾度言ひしか

桜を見むと

雲行きの怪しくなりて花見行華やぎし車中の黙しがちなる

わが目ざす桜の里は雨なりや行き交ふ車の玻璃戸濡れゐる

雨に濡れし窓に数多のさくら花とどむるままに車走れる

散りしきる桜の下を通りしか花びら積みて走り来る車

トンネルを一つ越ゆれば野の開け広き空より薄日さしきぬ

さ緑の芽吹ける木々はすももとふはるかに続く甲州の里

黒ずめる幹に衰へ見ゆれども神代桜みごと咲きゐる

その齢千八百年とぞこの桜曲る枝ぶり風格のあり

咲き初めはくれなゐの濃く日を重ね淡くなりゆくと神代桜

古都西安の春

ふるさとに少くなりし菜の花のはるか続けるここ中国に

桐の花真盛りにして西安の街紫に煙りて見ゆる

さ緑の並木の柳揺れゆれて手触れつつゆく西安の街

ゆるやかに太極拳をなす人の動きはあれど音のあらなく

海を越えはるけき道を馬に乗りここ西安に空海来しと

湯気立てる熱き豆乳注がれてまづは始まる中国の朝餉

かすかなる胡弓の音色聞きにつつ朝粥ゆるりと味はひてをり

八重桜ぼたんの花も咲き満ちて揚貴妃の名にふさふ園かな

華清池の池ひろびろと広がりてここ廻りしや玄宗と揚貴妃

道の辺の白木蓮を見やる時ひと日の疲れほとびてゆきぬ

松の大樹よ

大き枝四方に張りてゆるぎなき力漲る松の大樹よ

真後ろゆ朝光受くる松大樹幹のか黒に影のごとかる

老松を囲める小さき柵ありて廻りいゆけば百歩を越せり

緑濃き松かさしみらに枝につけ松の大樹の葉は茂りたる

松の葉の一本一本針のごと天に向ひて力満ちたり

松の木の根方に残る古き井戸江戸の屋敷の面影ありて

ひがし西北に南に四方より松を眺めて飽くるを知らず

幾年の風雨に耐へ来し松大樹ま向ひをれば力沸き出づ

ある窓から

空高く日は昇りゆきいつしらに薄き白雲消え果ててゐぬ

ひとひらの薄き雲より透き見ゆる空の青さよやはらかくして

昇りゆく朝の日受けて高きビルの一つの窓の赤く燃ゆるがに

灰色の空ひと色に広がる日高層ビルの霞みて見ゆる

さまざまな動きを見する浮雲の今日はあらなく空は灰色

マンションの窓に灯火点り初め暮れゆくままに数の増えゆく

夜半遅く灯ともりてゐし裏窓の明け方の今いまだともれる

赤と青のライトまばたく夜のビル昼見るよりも生き生きとせり

今年初にとんぼを見たり七階の窓を横切りてなほ上りゆく

つね見やるもくれん今朝は伐られゐて白き新車の置かれてありぬ

垣の朝顔

朝顔の咲き初むる花を見にいかなと夜明くる頃をひたすら待ちぬ

朝顔の白きが花びらたどきなく垂れゐる見れば夕顔に似る

冴えざえとしたる青花咲かしむる小さき朝顔原種にあるか

青淡き花弁に三すぢ濃き青のしぼりの朝顔けさ咲き出でぬ

朝なさなここな朝顔を見に来つる人ありて目礼交はすが慣ひ

七色の朝顔並び咲き揃ふこの四つ目垣去り難くゐる

彩りのとり合はせよき朝顔を植ゑしは誰ぞ会ひてもみたし

行きずりに朝顔につる巻きやりて立ち去る人あり背広姿の

雲の移ろひ

朝空をちぎれ流るる薄墨の雲のふちどり金箔のごと

明けゆけば薄墨の雲かき消えていつしら白き綿雲の飛ぶ

忽ちにくれなゐ失せて明けの空ただ淡淡しき水の色となる

動かざるごと見えながら動きゐる雲の流るる空の広さよ

七階の玻璃戸越しなる夕空の薄くれなゐの街を包みぬ

一瞬に薄くれなゐに染まりたる夕べの街は童話めくなる

台風の迫り来るらし今朝の雲飛ぶがごとくに北に流るる

西の空ふとも見やれば満月の傾きてあり野分去る朝

鳥の声満つ

目を凝らし桜大樹を見てあれば葉蔭に数多の鳥のゐるらし

かすかにも葉群揺らせて数多なる雀さへづる桜大樹に

幾千の鈴鳴らすごと雀らの声響き合ふ桜大樹に

銀の鈴あまた吊らるる幻を桜大樹の群雀に見き

枝揺れて飛び移るらし雀らの黒き影見ゆ桜大樹に

小さき枝揺らし雀の飛びゆきてまたもどりきぬ桜大樹に

落葉かとも見紛ふほどに雀子の一羽降り立つ桜木下に

西日受け桜大樹の輝けるときし雀子あまた飛び来る

雀らの姿は見えね繁る葉のかすかに揺れつつ鳴く声の満つ

腰痛き日に

脊椎を病みたる痛みいかなりし子規思ひつつ夜を目覚めをり

耐へ難き痛みに耐へて歌詠みし子規の心のいかに強きか

襲ひくる腰の痛みにわが行く手厳しきものと思ひ定めつ

寝返りを打たむとすれどその痛み思へば暫しためらひてをり

二歩三歩部屋内歩みあまりにも腰の痛きに歩を進め得ず

立ち上がるただその事の難(かた)きこと知りてたぢろぐ腰の痛めば

椅子の背を掴みて腰をかばひつつ次の足取り図りかねゐる

起き上がる時に蠢く芋虫のごとき動きの吾れをかしむ

思ふこと様々あれど為すことの叶はぬことを噛みしめてをり

冬の病室

点滴の雫の淡く光りてはゆるり落ちくる冬の早暁

点滴の落ちくる雫さしのぼる朝日受くるときまばゆく光る

見上げたる点滴容器に真青なる空の映るを今し見出でぬ

点滴の今朝は忙しく落ち来つる日の光受け点滅しつつ

夜深く小さき明りに点滴の雫は蛍のごとく光れり

富士見ゆとひとり声あげ病室の窓に身を寄せひたに見つむる

前景に連なる山は丹沢か白き富士の嶺小さく見ゆる

いつしらに空霞みゆき白き富士あはあはとして姿消えゆく

思はずも春はあけぼのとつぶやける空とはなりて今朝は立春

雪降りしきる

目覚むれば大き玻璃戸を一色に埋みて白き雪降りしきる

絶え間なく降りくる雪は右に舞ひ左に舞ひてひたに落ちゆく

坂道のはるか彼方の信号の赤瞬ける雪降る中に

病院に来るバス坂を登る見ゆ誰を乗せ来やこの雪の日に

雪降りてややほの暗き昼日中ライト点してバスゆるり来る

雪の日は見舞ひ客なく窓に舞ふ雪片のさま飽かず眺むる

雪の日に思はぬ友の訪ひくれぬ黄色きバラの花束持ちて

たまさかに玻璃戸につきし雪片の珠とはなりて流れ落ちゆく

打つごとく玻璃戸につきたる一片の雪は結晶の形をなせる

花々に寄せて

八重に咲くチューリップの花珍しも重ぬる花びら牡丹にも似て

鮮けき黄色は白き壁に映え咲き極まらんとすチューリップの花

沈みたる気分晴れ来ぬ澄める黄のチューリップの花開ききりたり

十まりのチューリップの花咲き揃ふを心足らひて眺めゐにけり

ヒアシンスの花の伸び立ち良き香り部屋に漂ふここ二三日

わが部屋を訪ふ人誰もよき香りと言ひて気づきぬヒアシンスの花に

掌に乗る程小さき鉢の草黄の花ほつほつ咲き初めにけり

花の名を思ひ出せぬもどかしさまたも眺むる紫の花

窓閉めし夕暮れの部屋にストックの香り漂ひ一日終はれる

珍なる蘭

賜はりし箱を開けば白き蕾持ちたる蘭の鉢現れぬ

南の国からはるばる来りしかミルトニアとふ名の白き蘭

くれなゐの蝶とまるがの花弁もつ蘭の花芯を覗きて見入る

蝶々がとまつてゐるよと指さして蘭の花見つむ女孫三歳

かく美(は)しき蘭作りしは神のみの造化の技と信じて止まず

紅の胡蝶のひそととまりゐる気配のありぬ夜の蘭の花

青々と大き幾葉の繁るカラー涼やかなりしややに揺れゐて

伸び立ちしカラーの葉末黄ばめるを昨日も今日も切りかねてをり

窓に置くカラーの緑葉揺れゆらし五月の風の部屋に吹き入る

この薗をいかに詠まむと朝夕に眺めつつゐて五日を過ぎぬ

リハビリの日々

足萎えて車椅子より立ち得ぬをまづは立つべくリハビリ始む

支へられやつと立ちたるわが姿鏡に見れば背の丸まりて

しかと握る平行棒の金属のややに冷たく心地よきかな

五歩歩み戻らむとすればわが身体ぐらりと揺れて支へられたる

リハビリの量僅かづつ増しゆけば身内に力漲りてきぬ

リハビリにひるむ心と立ち向ふ心のありてせめぎ合ひをり

むくみたるわが足重く底無しの泥田に足をとられゐるごと

わが足のむくみて重し僅かなる敷居の高さを越えかねてをり

むくみたるわが足さすりくれにつつ故郷のことナース語れり

「サキクサ」を待つ

サキクサの今日は着くやと郵便のバイクの音を心待ちをり

配達の時刻変はりて午後となり待つ間の長きを日々かこちゐる

配達のバイクの音の近づきてポストに郵便落つるを聞きぬ

郵便夫の足音に耳を澄ましゐし葭子の歌を思ひ出だしをり

配達の人立ち寄らず過ぎゆくを病む床に聞く葭子鋭き

ひたすらにサキクサ待てど今日もまた思ひ叶はず気落ちしてをり

なじみたるサキクサ包む封筒を今日は見出でぬ郵便物の中に

きつぱりと白地に黒字浮き立ちてサキクサの文字潔ぎよきかな

数多なる歌サキクサに載りをればわが歌いづこと頁繰りゆく

さやさやと狭庭の竹のさやぐ音聞きつついつしかまどろみてをり

臥しゐても

住まひ初めし三十年前は緑濃き森見はるかすわが家なりしが

常坐る位置より見ゆる高き空屋根に区切られ梯形となる

外に出るを叶はぬ身なれば梯形に限られし空常に眺むる

疼きとか痛み表す言の葉のつらさに耐へつつ膝さすりゐる

果てしなく気の沈みゆく日のありき病癒えねばひと日臥しゐる

起き出でむと試みたれど背の痛み今朝は激しくまた床に臥す

床に臥すこと多ければ限られし事を見つめて歌を詠みつぐ

身近なる事に新しき気付きあり目を凝らしつつ見つめてをれば

臥しゐても研ぎすまされし心持て深く見つむる歌を詠みたし

絶　詠

迷ひゐて決めかねをりし吾が歌を夢の中にてまだ作りゐる

解説

この歌集は、平成五年一月から平成十年十二月までに短歌誌『サキクサ』に掲載された茂登子さんの全作品四百五十八首を、その年度順に収めたものです。

短歌誌『サキクサ』は、昭和五十二年九月に大塚布見子先生によって創刊され、「短歌の伝統に根ざし、写実、平明、まことの抒情を究める」ことを目指したもので、現在二十二周年を迎えています。

茂登子さんの作歌活動は、平成四年の夏、ご入院中の病床詠に始まりましたが、その発端について、お仕事のお仲間にあてた「にわか歌人通信」と題する書簡に、

「実は、入院して以来なんだか急に短歌がすらすらと頭に浮かぶのです。……熱の副産物のようです」

と記し、十五首の短歌が披露されています。そして、この「にわか歌人通信」はその後も発信ごとに病状の報告に加えて必ず数首の短歌が記されているのでした。その後、女学校の同級生数名が入会している縁（えにし）で「サキクサ短歌会」に入会され、主宰大塚布見子先生

の御指導の下に熱心に作歌に励まれましたので、その歌境は急速に凝縮度、透明度を増してゆき、就中、御夫君の赴任地であった高知の自然詠「四万十川を行く」と題する一連は「準サキクサ賞」を受賞されています。

また、定例歌会にもご病床から出詠なさり、度々高点入選をなさいました。

最後の一年程は、骨粗鬆症による痛みに嘖まれ続けた病床詠で、誠に凄絶なものですがその果てに、

迷ひゐてきめかねをりし吾が歌を夢の中にてまだ作りゐる

を絶詠として惜しくも平成十年九月二十四日に逝去されました。この作品は茂登子さんが生涯を通してつらぬかれた「現在できることを前向きに全力を尽す」姿勢の結晶であったと思います。

濱口喜久子記